

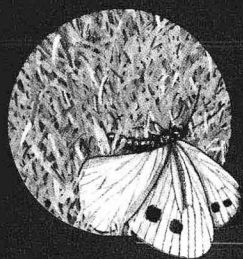
立花ゴルフ倶楽部



河野修一郎

毎日新聞社

立花 ゴルフ倶楽部



河野修一郎

毎日新聞社

たちばな
立花ゴルフ倶楽部

一九九一年九月一五日 印刷
一九九一年九月三〇日 発行

著者 河野修一郎
こうの しゅういちろう

編集人 深瀬正頼

発行人 戸田栄輔

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇一五 東京都千代田区一ツ橋

〒五〇〇 大阪市北区堂島

〒八三三 北九州市小倉北区紺屋町

〒四四〇 名古屋市中村区名駅

印刷 精興社
製本 大口製本

落丁・乱丁本は小社でおとりかえます。

立花ゴルフ倶楽部

装
幀
倉
橋
三
郎

一章

窓の向こうに荒川鉄橋の見える部屋だった。朝の目覚めぎわに聞く列車の通過する気配が、馬部雄司^{べゆうし}は氣に入っていた。その音で大方の天氣が予想できたし、列車が上りであるか下りであるかも判った。

赤羽から乗って神田まで行く。そこで地下鉄銀座線に乗り換え、ひとつめの駅の三越前で降りる。これが彼の通勤コースだった。しかし内勤の社員と違って、月曜の午後か火曜の朝には、アパートの近くに置いてある社用車で得意先へ廻るので、定時の出勤は月曜の朝だけということが多かった。

ラッシュの人波に揉まれ地下鉄の改札を抜け、地上に吐き出されるとさすがにほっとする。三越本店の古めかしい建物を大通りの向かいに見ながら、これも古くからの店である刃物屋の角を右に曲がる。昭和通りに架かる高速道の下をくぐって右に首を巡らせば、彼の勤務する東星緑化サービスの入っている九階建の黒っぽいビルがすぐ目のまえに見える。

そのビルのドアを押しながら、この朝の馬部はふと足の運びが鈍くなるのを覚えた。エレベーターが来たらしく、同じビルに事務所のある他社の勤め人たちが吸い込まれていった。

上昇するエレベーターの所在を示すランプが明滅して九階まで達し、また下降して来るのを気怠い気分で眺めていた。周りに人影はなかった。少し疲れているのかもしれない、と思った。それとも自分では意に介していないつもりなのだが、やはりほんとはこたえているのだろうか。一週間まえの四月第一月曜日のことだった。恒例の春の人事異動が発令された。馬部雄司が今年こそはと密かに期待していた親会社・東星化学への復帰は見送りになった。もともと、自分が今年も戻してもらえないということは、三月には判っていたことだ。つまり内示がなかったのだから、異動があるはずはなかった。諦めていたことだったのに、小規模な異動の告示が掲示されてみると、そこに自分の名前がないことがやはり寂しく思われたのだった。

彼は九州のある地方都市で化学を学び、大手総合化学会社、東星化学株式会社の化成品営業部に採用された。一ツ橋の本社ビルの除草剤販売グループに四年間籍を置いたのちに、子会社のひとつ東星緑化サービスに出向になった。そこは名のとおり公園やゴルフ場の緑化に使う資材や薬剤を販売する会社で、ゴルフ場のコースの管理なども下請業者を使ってやっていた。

この四月で出向十年が過ぎた。三十六歳で課長という役職は、五十名ほどの小企業であることを考慮すれば当然といえる。親会社に同時に入社した者たちの出世頭も課長ではあるが、同じ課長でも馬部が四名の部下しか持たないのに比べ、親会社では十五名がその指揮下にある。格がまったく違うのである。

エレベーターは馬部ひとりを箱の中に閉ざし、上昇し始めた。一ツ橋に通っていた頃、よくビルの入口の付近で顔を合せる経理部の女子社員がいた。髪の良い目鼻立ちの現代的な印象の娘で、若い社員たちの間でいつも話題になる存在だった。彼女はエレベーターの中で何気ないふう

にちらと媚をおびた上目遣いの視線を投げてよこしたものだ。出向の内示があつて実際に出向するまでの一カ月の間、二人は恋人同然だった。彼はその頃の親密さを思い出すたびに、出向したとたん、まったくいつてよいほど彼を相手にしなくなつた彼女の心の内が理解できずに苦しんだ。結局、彼女は馬部を秘密のもれる惧れのない遊び相手として選んだとしか思われなかった。

その彼女が一年も経たないうちに結婚した。相手は馬部と同年入社の方で、皮肉にも、その男が今では親会社・東星化学株式会社の化成品部の出世頭だった。

馬部は先日、ある得意先の社員から、親会社その男に三人目の男の児が生まれたという話を聞いたが、今またそのことを思い出していたのだった。

彼がまだ未婚だということを知つた人は、なぜ結婚しないのか、と決まって訊ねた。彼は、女性に縁がありませんでしたので、といった曖昧な答え方をした。見合いを勧めてくれた人もあつたが、彼が幾度となくその勧めを固辞し続けてきたので、今ではもう誰も彼に縁談を持ち込む人はいなくなつた。

彼はタイムカードを押すとロッカールームに入つて背広の上衣を脱いだ。勤務が始まると季節に関係なくワイシャツの袖をまくり上げるのが彼の癖だった。中学時代に柔道部にいたことのあつた骨格の太いガツシリした身体に、その腕まくりが似合つて、いかにも張り切つた頼もしい姿に映つた。

十時から会議が生まれ、昼食のあと一時間ばかりでそれが終つて営業課の者は社から飛び出して行く。緑化サービスの営業課は三課あつた。馬部の任せられている第一課は関東以北が守備範囲で、課長の彼を含めた五名がそれぞれの地区を担当していた。第二課は東海以南で、第三課は

ゴルフ場管理に伴う芝の張替えや薬剤防除作業などを下請け業者を使って担当した。会議が終って会議室から出て来ると、馬部の机上にメモが載っていた。

アルプ社 富岡様より電話がありました。
会議終了し次第連絡下さいとの事。
pm 1:10

彼は手帳をめくって電話番号を確認した。

アルプ社は米国カリフォルニア州に本社のある多国籍企業で、赤坂の米国大使館に程近いビルに入っている。正式にはアルプ日本社と呼ぶのが正しく、医薬品、動物医薬、農薬などを販売している。

そこで化成品営業部マネージャーという肩書で農薬の担当をしているのが富岡だった。歳は四十五、六、髪を短く刈っている。こにこしている。都会的な育ちの良さを感じさせる男だが、まれに外国人を混じえて話をすると言語に詰まって、ええと、ほら、といった言葉をはさんで額を叩いたりする。

ダイヤルインの電話を富岡自身が取った。

「やあ、馬部さん。忙しいところを済みませんねえ」

馬部からの電話を待ちかねていたといった様子で、富岡はいった。

「なんででしょうか、私に？」

「あなたね、付かぬ事を訊ねますけど、ほら、いつか一緒に飲んでいて、代議士の秘書だという

男に会ったの、覚えていない？」

「覚えていますよ」

「あのときもらった名刺、そこにある？」

「たぶん、あると思います」

「いま見てくださいかな」

「電話番号ですか？」

「そうなんだ」

彼は電話を保留にしたまま、抽出の中にぎっしり詰まった名刺の中から、その男の名前を捜しにかかった。このとき彼には、富岡が何で困っているのか、そしてその名刺をどう使おうとしているのか薄々見当が付いていた。富岡は板橋区高島平から自家用車で通勤しているが、かつて何度か飲酒運転で捕まっており、免許停止までいくらかも特点が残っていないと話していたのを記憶している。

保守系小党の代議士秘書の名と電話番号を告げると、富岡は礼をいってそそくさと電話をきった。

この日、馬部の机上に常日頃は見掛けない種類の書類が廻ってきた。それは発明者として馬部雄司の名を記した特許が成立したことを知らせるものだった。

馬部の考案したその特許というのは、何かを創造したといった種類のものではなかった。ある薬剤とある薬剤を混合することで、それまで単独ではほとんど実用的な効果のなかった病害に効くようになるという、いわゆる相乗効果を謳ったもので、組合せと比率だけを具体的に示した小

発明だった。彼はその片方にアルプ社の薬剤を使用したのだった。

アルプ社のその殺菌剤は効力が弱く、日本では農薬としての実績はゼロだった。それが三年まえ、グリーンサーという商品名の混合剤にしてからは徐々に伸びて、前年の売上は二億五千万を記録するまでになった。

ゴルフ場の芝生用殺菌剤の横綱は、神田に本社を構える日興化学販売のユーエルという商品だった。アルプ社と同じく米国カリフォルニア州に本社のあるUL社の製造するもので、アルプ社より三年遅れてアルプ社のものをそっくり真似た化合物を販売し始めたが、効力の面でははるかに優れ、現在十億円を超す商品に成長している。

昼行燈みたいな薬剤が二つ合わさって、きらりと光る存在になったことを一番喜んだのはアルプ社の富岡だった。彼は普及宣伝費の補助という名目で、年末にボーナスを馬部雄司名義の口座に振り込むことにした。

馬部はグリーンサーの特許成立を告げる書類のコピーをとって、鞆に仕舞った。この独占的権利の確立にはある人物の協力があつた。立花ゴルフ倶楽部のグリーンキーパー海老根謙の力添えがなければ、この商品は誕生していなかったろうし、また、ユーエルの市場の一角を崩すことも出来なかったろう。

埼玉県三郷市（みきょう）のインターチェンジから入って、常磐自動車道を北上しおよそ百キロを走ったところで那珂のインターチェンジを降りる。鳥獣センターや植物園のある県民の森の脇を通って那珂川を渡れば、程なく立花ゴルフ倶楽部が見えてくる。赤羽のアパートの近くの駐車場を発つ

て、二時間余りで那珂川を渡っているという事実には驚くことがある。在来の道路ではとてもこうはゆくまい。近年首都圏のゴルフ場開発はすさまじい勢いで進んでいるが、これはひとえに高速道路のお蔭だとつくづく思う。常磐、東北、関越、中央の各自動車道を利用すれば、相当な距離を往き帰りすることが可能になった。

四月、桜の頃の立花ゴルフ倶楽部は、その所在が遠方からでもよく見分けられた。駐車場を縁取るようにソメイヨシノが植わっていて、その花が目々を惹くからだ。

馬部は仕事でここを訪れるとき、いつも二十本ばかり植わったその桜並木の下を通るが、客用の駐車場に車を置くことはなかった。クラブハウスの横を抜けて、人工庭園の外側にある従業員専用の駐車場に入れる。

洋風のクラブハウスが多い昨今、ここだけは珍しく白壁と大屋根の目立つ和風の建物だった。しかし、一歩中に入ると木材をふんだんに使いながらも造りは近代的で、エントランスホールは吹抜けになり、二階への階段もゆったり出来ていた。

彼はフロントに歩み寄って、若草色の制服に身を包んだ顔見知りの女子社員に声を掛けた。

「お世話になります。海老根課長のところにお邪魔します」

その挨拶の文句は毎回決まっていたし、またそれに応える女子社員の返事も、ああ、ご苦勞様です、という判で押したような繰り返しだった。

海老根はゴルフ場のコースの管理責任者だった。現場で働く部下三十名を指揮し、プレーヤーが満足してくれるコースを保持するためにはあらゆる労力を惜しまない。大方の場合、禿げ症状を示す芝生の病害防除から、雑草の防除、松くい虫やコガネムシなどの害虫防除、さらには秋口

から冬場にかけて見せ掛けの芝の緑を出すための色素の散布まで、客の喜ぶことならなんでもやる。彼は他のどの従業員より早く出勤し、プレーヤーがコースに出るまえに自分でコースを見て廻る。別名グリーンキーパーという彼の役職は、その仕事の内容をよく表していた。

一階の端のコース管理課のドアをノックして内側に入ると、職員たちがたむろして十時の休憩をとっているところだった。馬部はその人たちに声を掛けて海老根の机のまえに進み、菓子折を置いた。海老根は、いつも済まないね、と受け取り、そばにいた若い者に手渡した。一見、馬部と幾つも違わないように見えるが、この春、長女が県下の女子短大に入学している。贅肉のないスポーツマンタイプだから若く見えるのだ。

「ま、そこに掛けなさい」

「失礼します」

職場での海老根に礼を欠くことはなかった。窓際に置かれた応接セットが二人の商談の場だった。ラウンジのソファや役員室の椅子などとは較べ物にならない安物で、それがまたひどくたびれていた。外はスタートテラスで、二十メートルほどの間隔を置いて一番のティグラウンドが見えている。

「どう、混んでたかい？」

「いいえ。順調でした」

「陽気がいいで眠気がさすだろう」

「そうなんです。だから、お邪魔する日は必ずコーヒーを飲んで出て来ることになります。……ところで、午後からの会議には？」

「おれが出るよ」

「そうですか。で、夕方は先約は入ってないですね？」

「馬部君が来ると判っていて、先約があるはずはないだろう」

馬部は海老根の目を見つめたまま軽く一礼した。

コース管理課の若い男が馴れない手付きで茶を運んで立ち去ると、馬部は足許に置いた鞆を取り上げた。

「お蔭さまで、向こう十五年ばかり、グリーンサーは芝生用の殺菌剤として私共で独占的に販売できることになりました。その通知がきのう届きまして」

海老根は彼の差し出した一枚の紙を黙って手に取って、しばらく眺めていたが、

「そりゃあよかった。運がよかったんだな」

といって馬部の手に返した。

「よかったら、このコピーはそちらに」

「発明者は君だ。君が熱心にいるから、手伝ったまでのことよ」

彼は海老根の言葉に感謝して、ほんとに写しはいらないかと念を押し、その書類を鞆に戻した。彼としては、海老根に協力してもらって完成した発明だから、一応経過の報告をすべき義務があると考えてのことだったが、しかしそれをいつまでも、あれはおれが作ってやった特許だ、といわれ続けるのもあまり有難いことではないと思っていた。馬部の感謝の気持は取引の中で充分に活かされていると相手が感じ取っているのなら、なにも好んで証拠など残す必要はなかった。

室内に低くブザーが鳴り渡った。休憩時間が終わったのだ。紺の作業服の男たちが部屋を出て行

くと、馬部は手帳を開いて身を乗り出した。

「課長。今月はいかがしでしょうか？」

「グリーンサーか？」

「はい。それもありますが、ほかのも、多少お願いしたいんですが」

「そうだな。グリーンサーは二十ケース。一キロ袋の二十袋入りをな。それから、除草剤が三十ケース。殺虫剤はもうしばらくしてから注文を出す。それでいいかな？」

「はい。ありがとうございます」

頭を下げる馬部の脳裏を、今月はまずまずか、という思いがよぎった。殺虫剤の注文が幾らになるか未定だが、芝生の殺菌剤と除草剤を合計すると四百万円になる。三月に思い切って買ってもらったのだから、今月は相手のいう数字で留めておこう。

馬部と海老根は、持ちつ持たれつの仲だった。その月の売上げがどうしても目標に達しない場合、馬部は海老根に無理をいつて買ってもらうことがあったし、その代り海老根が今月どうしても内密の金がいるといった場合、馬部の方が伝票を操作した。海老根は浮かせた農薬を知人の防除業者に通常の仕入値の八割ほどで売り渡すのである。

「害虫の防除は、だいたい例年どおりと考えていいんですね？」

「そうだな。松毛虫を五月中旬に一回叩いて、あとは松くい虫だな」

「一回分の原液が五十リットル必要だとして、十回ぐらいは散布するでしょう？」

「ほんとは一回にそんだけはいらないんだが、まあ、その程度だろう」

「判りました。それじゃあ、心積りとして五百リットルということで」

「うむ。そういう線だな」

「立花さんの場合、周囲の松林からの害虫の飛込みが心配ですから、やはり念には念を入れないといけないでしょう」

「うちの立地条件は、どうやら君んところの商売に都合よく出来てるみたいだな」

海老根は声をたてずに笑った。

「ありがとうございます。しかし、まあ、現実問題としておたくのあの松を枯らすわけにゆかないでしょう。風景の主役ですから」

「そうだな。やや過剰な防除になってしまうのは仕方ない。……しかし、最近は油断も隙もあったもんじゃないよ」

「なにか？」

「ついこの間、黙って廃水を瓶に汲んでいって、分析を頼んだやつがいてね」

「それで、結果はどうになりました」

「ちよつと肥料が検出されただけだった」

「立花さんの場合、これまで住民とのトラブルなんて聞いたことがありませんが、中にはそういうことをする人もいるんですね」

「いるよ。造成当時の反対派も少数だが残っているし、それに最近、この川下に新しく住宅団地が出来たろう。家庭電気製品メーカーの工場移転に伴って、一挙に東京周辺にいた連中が越して来たんでうるさくなった。……それに、ほれ、例の一件が表沙汰になったもんだから、なにかと外野席がかしましいんだよ。カメラマンや新聞記者もうるつくようになってしまつて」

馬部も〈例の一件〉というのは知っている。十年まえオープンした立花ゴルフ倶楽部と、その五年後にオープンした隣の地区のゴルフ場の開発に絡んで、役場とゴルフ場開発会社の間に不正があったということを、当時の役場関係者が定年退職した去年になって暴露したことを指す。

不正というのは単なる贈収賄ではなかった。役場当局が土地所有者から用地を買収するに当って、「村の発展のために」という美名で普通の雑木山や原野ほどの安い値段で買い上げ、それをはるかに高い値段で業者に売り渡していたという二重価格が問題にされたのである。当局は差額として浮かせた金をゴルフ場建設の反対派対策費や研修費などに振り当てていたのだが、そのことをゴルフ場開発会社は了承済みだったという。

「どこでもやつとることなのに」海老根はいった。「ちょうど選挙があつたろう、村長の。あれが引き金になって、騒ぎが大きくなってしまったな」

「そうしますと、いまは薬剤の散布にも神経を遣うところですね」

「そうなんだ」海老根は顔を顰めた。「休日に散布するか、そうでなきゃ、緊急の場合は早朝になるなあ」

「水の分析をゴルフ場側としても定期的に実施していますよね」

「やっている。毎月一回、廃水を抜き取って分析の専門家に依頼してるが、問題ないな」

その辺のことは管理者として、農薬が廃水に検出されないよう、散布時の天候などに気配りをするのである。

「馬部君、これからどうする？」

「会議に行きましよう」